増訂 女子文法教科書 下卷

4b
815
大8

42143
教科書文庫
4
815
42-1919
20000
73171

資料室

大正八年三月八日
文部省檢定濟

46
815
k8

文學博士 關根正直
古谷知新 共著

增訂 女子文法教科書

東京 寶文館藏版

広島大学
教
73171
図書

增訂 女子文法教科書下卷 目次

第一章 形容詞の活用……一
練習……二
第二章 形容詞活用の名稱……三
注意……四
練習……五
第三章 助動詞の活用……六
練習……八
第四章 助動詞活用の名稱……九
注意……一三

第五章　動詞と助動詞との連續……一四
一　未然形に連る助動詞……一四
注意……一五
二　連用形に連る助動詞……一七
注意……一八
三　終止形に連る助動詞……一八
四　連體形に連る助動詞……一九
五　未然形及已然形に連る助動詞……二〇
練習……二二
第六章　體言及用言と助詞との連續……二三
一　體言附屬の助詞……二三
注意……二八
二　用言附屬の助詞……二九

注意(一)……三一
注意(二)……三三
三　係詞の助詞……三四
練習(一)……三六
練習(二)……三七
第七章　假名遣及音便……三八
練習(一)……四一
練習(二)……四二
練習(三)……四二
練習(四)……四三
第八章　體言と用言との關係……四三
主語　述語　客語　補語……四三

練習……四七
第九章　修飾語……四八
練習……四九
第十章　獨立語……五一
練習……五二
第十一章　單文……五二
練習……五四
第十二章　重文……五五
練習……五六
第十三章　複文……五六
練習(一)……五九
練習(二)……五九

第十四章　文の成分の節略……六〇
練習……六一
第十五章　文の解剖……六三
練習……六八
附錄
助動詞活用表
口語助動詞活用表
動詞と助動詞との連續表

下卷目次終

增訂 女子文法教科書下卷

第一章　形容詞の活用

花白く咲く。
夕顔の花白し。
白き花を好む。
花白ければ闇夜にも見ゆ。

右の例にて「白し」といふ形容詞の種々に形を變ふるを知るべし。然して其變化する部分を語尾といひ、變化せざる部分を語幹といひ、語尾の變化を活用といふこと動詞に異らず。

形容詞の活用は、「く」「し」「き」「けれ」の四つなり。

白（しろ）・重（おも）　く　し　き　けれ

「たのし」「やさし」の如く語幹に「し」音を有する形容詞は、其活の「し」に限りて、語幹のまゝなりと知るべし。

樂（たの）し・優（やさ）し　く　し　き　けれ

練習　次の文中の形容詞の活用を示せ。

一　この蟲は形ちひさく、聲いとよし。

二　うるはしき日影漏りきて、風いと涼し。

三　砂に臥し、砂に坐す、いとおもしろし。

四　霜枯の庭の木蔭に、珍しき花咲けり。

五　いとゆかしき景色にて候ひき。ねたしとおぼさば、この次の遠足には、必ずともにゆき給へ。

第二章　形容詞活用の名稱

形容詞の活用もまた動詞の活用と同じく、各段の名稱あり。但し形容詞は命令形を有せず。

未然形 連用形	終止形	連體形	已然形
（近）く	し	き	けれ

第一の活用形なる「近く」は「ば」につゞきて「海近くば行かむ」の如く未然形をなし、また用言に連りて「近くなき處なり」の如

く連用形をもなす。

第二の活用形なる「近し」は「海近し」の如く終止形をなす。

第三の活用形なる「近き」は體言に連りて「近き處に海あり」の如く連體形をなす。

第四の活用形なる「近けれ」は「ば」「ども」につゞきて「海近ければ避暑に適す」「海近けれども波の音は聞えず」の如く已然形をなす。

語幹に「し」音を有する「樂し」「嬉し」等の形容詞の終止形は「遊ぶは樂し」「君に逢ふは嬉し」の如く用ひて「樂しゝ」「嬉しゝ」の如く「し」の音を重ねざるが普通なり。

注意　「シク、シ、シキ」活用ノ終止形ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用フル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。（文法上ノ許容）

口語にては、連用形の語尾「う」ともなり、終止形連體形共に其語尾「い」となり、已然形は「いけれ」ともなる。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
文語 近	く	く	し	き	けれ
文語 樂し	く	く	し	き	けれ
口語 近	く	く（う）	い	い	けれ（いけれ）
口語 樂し	く	く（う）	い	い	けれ（いけれ）

練習　次の文中の形容詞活用の名稱をいへ。

一　人遠き慮なければ必ず近き憂あり。

二　人の騷ぎ罵るさまいともの凄し。

三　このまゝ朽ち果てむは口惜しきこと限なし。

四　雪舟とて畫を善くする者あり。

五　何の興味もなければ、何の情趣もなし。

六　交際あまり繁ければ、萬事につけてうるさきものなり。

第三章　助動詞の活用

學びたし。

學びたく思ふ。

學びたき事多し。

學びたけれども暇なし。

右の例にて「たし」といふ助動詞の「たく」「たき」「たけれ」と變ずるを知るべし。かくの如く變化するを**助動詞の活用**といふ。

たし　べし　まじ　ごとし

右は形容詞に似たる活用をなす助動詞なり。

る　らる　す　さす　しむ　つ

右は動詞下二段に似たる活用をなす助動詞なり。

り　ざり　なり　たり　けり　べかり

右は動詞良行變格に似たる活用をなす助動詞なり。

ず　き

右は特別の活用をなす助動詞なり。

む　ぬ

右は普通文にては、只一の活用のみ用ひらるゝ助動詞なり。

練習　次の文中に適當なる助動詞を補へ。

一　名殘を惜むに似○○。

二　彼は物理學上に萬古不易の定則を立て○○。

三　年頃の我儘の振舞、今更のやうに耻しく存ぜ○○候。

四　此の日開戰する旨の詔を發せ○○。

五　少年の習慣は終身永續す。たとへば木の皮に文字を刻むが○○○。

六　馬車自動車の縱横に馳するさま、實に人をして目を眩し膽を寒から○○。

第四章　助動詞活用の名稱

助動詞の活用も亦その活用形によりて各段の名稱あり。

一　動詞下二段活用に等しき助動詞

	未然形 連用形 命令形	終止形	連體形	已然形
一	れ	る	るゝ	るれ
二	られ	らる	らるゝ	らるれ
三	せ	す	する	すれ
四	させ	さす	さする	さすれ
五	しめ	しむ	しむる	しむれ
六	つて	つ	つる	つれ

口語にては「る」「らる」「す」「さす」「しむ」皆下一段活用に等しき形をなす。（卷末の表參照）

二　動詞良行變格活用に等しき助動詞

	未然形	連用形 終止形	連體形	已然形 命令形
一	ざら	ざり	ざる	ざれ
二	なら	なり	なる	なれ
三	たら	たり	たる	たれ
四	（ら）	り	る	（れ）
五	（けら）	けり	ける	けれ
六	べから	べかり（べかる）		（べかれ）

三　動詞奈行變格活用に等しき助動詞

	未然形 連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

四　形容詞の活用に類せる助動詞

	未然形 連用形	終止形	連體形	已然形
一	たく	たし	たき	たけれ
二	まじく	まじ	まじき	まじけれ
三	べく	べし	べき	べけれ
四	如く	如し	如き	

口語にては「たし」の終止形連體形ともに「たい」となり「まじ」の終止形は「まい」となる。（卷末の表參照）

五　活用の特別なる助動詞

未然形 連用形 終止形	連體形	已然形
ず	ぬ	ね
終止形	連體形	已然形
む	む	め
らむ	らむ	らめ
き	し	しか
らし	〔らし〕	〔らし〕
まし	まし	ましか
じ	〔じ〕	〔じ〕

口語にては、「ず」の終止形連體形ともに「ない」又は「ぬ」となり、「む」の終止形は「う」又は「よう」となり、「らし」は「らしい」となる。（卷末の表參照）

上例中「ざり」には終止形なし。

「つ」「ぬ」「らむ」「らし」「じ」等は、專ら美文和歌等に用ひられ、「り」の未然形「ら」已然形「れ」及び「けり」の未然形「けら」等また普通文には用ひられず。「べかり」も未然形連用形のほかには用ふることなし。又「如し」の已然形も用ひらるゝことなしと知るべし。

下二段活用に等しき助動詞の命令形には各「よ」を添へて用ひらる。

注意　過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體形ノ「シ」ヲ終止形ニ用フルモ妨ナシ。（文法上ノ許容）

第五章　動詞と助動詞との連續

助動詞は、動詞に連續して、種々の作用をいひあらはす詞にして、獨立しては意味をなさざるものなり。

助動詞の動詞に連るには、その未然形に連るものと、連用形に連るものと、終止形に連るものと、連體形に連るものと、未然形及已然形に連るものとの五種あるなり。

一　未然形に連る助動詞

父に許さる。(受身)　文章も作れば作らる。(可能)

姫君琴をひかる。(敬意)

世に捨てらる。(受身)　山も越えば越えらる。(可能)

殿下歸朝せらる。(敬意)

「る」は四段活用、奈行良行兩變格の諸活用に連り、「らる」は上下二段、上下一段、加行佐行兩變格の諸活用に連り、ともに受身可能又は敬意をあらはす。

犬を打たす。(使役)

姫君琴をひかせ給ふ。(敬意)

塵を捨てさす。(使役)

殿下歸朝せさせ給ふ。(敬意)

花を折らしむ。(使役)

主上行幸せしめ給ふ。(敬意)

注意　「……セサス」ト云フベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　手習サス　周旋サス　賣買サス

「……セラル」ト云フベキ場合ニ「……サル」ト用フル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　罪サル　評サル　解釋サル

「得シム」ト云フベキ場合ニ「得セシム」ト用フルモ妨ナシ。

（文法上ノ許容）

「す」の連る動詞は、「る」の連る動詞に同じく、「さす」の連る動詞は、「らる」の連る動詞に同じ、「しむ」はすべての動詞に連る。然していづれも使役又は敬意をあらはす。

怪むに足らず。

信ぜざる者なし。

君はまだ遠くは行かじ。

いづくにか行かむ。

「ず」「ざり」「じ」は打消の意をあらはし、「む」は未來の意を示し、ともに一切の動詞に連る。

二　連用形に連る助動詞

御目にかゝりたし。

聲高く歌ひき。

今は昔、ある村に舊りたる祠ありけり。

母の面影によく似たり。

夜更けて人しづまりぬ。

雨はら〳〵と降り出でつ。

「たし」は希望の意、「き」「けり」は過去の意、「たり」「ぬ」「つ」は完了の意を

あらはす。

「き」の活用「し」「しか」は加行佐行兩變格活用に限り、連用形に連らずして未然形に接續し、又加行變格には其連用形にも連り、又其活用の「き」は佐行變格の連用形にのみ連る。

注意　佐行四段活用ノ動詞ヲ、助動詞ノ「シ、シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナド云フベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドスルモ妨ナシ。（文法上ノ許容）

三　終止形に連る助動詞

明日は雨降るべし。（推量）

國法に從ふべきものなり。（義務）

萬里の波濤も越えば越ゆべし。（可能）

午前八時に出頭すべし。（命令）

ゆめ〳〵忘るべからず。

夜半にや君が越えて行くらむ。

郭公鳴きて過ぐらし。

いまだ故郷にはかへるまじ。

「べし」は推量、義務、可能、命令等種々の意をあらはし、「べかり」は「べし」と「あり」と連合せるものにて、其意「べし」に同じく「らむ」「らし」は推量「まじ」は否定の推量をあらはす。

「べし」「べかり」「らむ」「らし」「まじ」は良行變格の動詞に限り、終止形に連らずして、連體形に接續す。

四　連體形（または體言）に連る助動詞

思ふことを書き續くるなり。

人の歎賞する所なり。

「なり」は動詞形容詞の連體形、もしくは體言に連り、指定する意をあらはす。

五　未然形及已然形に連る助動詞

危難は既に過ぎ去れり。

彼はまたもや失敗せり。

「り」は四段活用の已然形と、佐行變格活用の未然形とに限りて接續し、完了の意をあらはす。

連用形に連る「たり」のほかに、

君は君たり。

太政大臣關白たり

の如く用ひらるゝ「たり」は、體言にのみ連りて、指定の意を示す。

雲の如し。

花の散るが如し。

水の流るゝ如し。

「如し」は「の」「が」の助詞を伴ひて、體言用言に接續し、（文「が」を省きて直に動詞の連體形に連る）比較の意をあらはす。

水清からず。

其の名世に高かりき。

の如く用ひらるゝ「かり」は形容詞の連用形に「あり」の連合して成れるものにて、良行變格の活用をなす。

各種の助動詞互に重り合ひて用ひらるゝ事あり。然して其接續におのづから一定のきまりある事、次の例によりて知るべし。

容易に區別せられ(未然)ざる(連體)なり。

維新前後に破壞せられ(連用)たる(連體)なり。

幸にして觀客を失望せしめ(未然)ざり(連用)き。

練習　次の文中の助動詞の意義及び連續を說明せよ。

一　かくては大名の城下にはなるまじ。

二　山も崩され沼も埋められだり。

三　秋風は涼しくなりぬ。いざ野に行かむ。

四　ことしおほみゆきし給はむよし仰せいださる。

五　親しき友にわかれて、故鄕にたちかへれり。

六　その家甚だ富みたりければ、十分の教育を受けられたり。

七　陛下には文學の御たしなみ深くわたらせ給ひ、折にふれさせられての御歌など實にめでたし。

八　自然界の美を顯さむとするものは、須らくこの間の消息を考察せざるべからざるなり。

第六章　體言及び用言と助詞との連續

一　體言附屬の助詞

の　櫻の花。　汝の家。

が　梅が香。　君が代。
つ　外つ國。　天つ神。

右の「の」「が」「つ」は兩體言の間におかれて、下の體言の所屬を示す意に用ひらる。このほかに、動作を起す事物を示す「の」「が」あり、卽ち「五月雨の降る」「鳥が鳴く」の如し。

に　馬に乘る。　汝に問ふ。
へ　東へ向ふ。　朝鮮へ行く。
を　花を觀る。　字を習ふ。

右の「に」は動作の位地を示し、「へ」は動作の方向を示し、「を」は動作の目的を示す。「を」には、別に動作の場所を示すあり、卽ち「橋を渡る」「坂を下る」の如し。

と　花と月とによし。　青と黃とを合す。

右の「と」は事物を並べあぐる意に用ひらる。このほかに動作の歸着する事物を示すあり、卽ち「毛蟲蝶となる」の如し。

より　山より下る。　車よりおる。
から　今日から勉强すべし。　此處から見ゆ。
まで　夜まで待つ。　此處まで來れ。

右の「より」「から」は動作の起點を示し、「まで」は動作の終點を示す。但し「より」には比較の意を示すあり、卽ち「山より深し」の如し。

は　爲す者は常に成り、行く者は常に至る。
も　鳥もうたひ蝶も舞ふ。

右の「は」は差別を示すに用ひ、「も」は一致を示すに用ふ。

のみ　憂ふべきはこれのみ。

ばかり　知れる者は我ばかりなり。

右の「のみ」「ばかり」は他に並ぶ事物なき意を示す。「ばかり」には、口語の「クラヰ」の意なるあり、卽ち「二十歳ばかりの頃」の如し。

か　霞か雲かはた雪か。

右の「か」は疑問の意を示す。

だに　寫眞だにおくらせ給へ

すら　犬すら恩を知れり。

さへ　雨はげしきに、雷さへなりいでたり。

右の「だに」「すら」は、輕き事物をあげて、重きを言外に知らする

意を示し、「さへ」は、あるが上になほ他の事物の添はる意を示す。

以上は、いづれも體言に附屬する助詞なり。されどもまた用言にも連りて、

何ぞ思はざるの甚しき。

夢のさめたるが如し。

月を見るによろし。

夜の明くるを待つ。

疎きへもいひつかはす。

思ふと思はざると。

日の出づるより日のいるまで。

行くから歸るまで。
ありがたきは母の情なり。
行くもあり、かへるもあり。
能はざるにあらず、せざるのみ。
心に思ふばかりなり。
行くべきか。歸るべきか。
思ふだに　見るすら　歸るさへ

の如くも用ひらる。かく體言附屬の助詞に接する用言は、概ね連體形をなし、體言と同等に用ひらる。之を準體言といふ。

注意　助詞ノ「ノ」ハ動詞助動詞ノ連體形ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例　花ヲ見ルノ記。
學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

語句ヲ列擧スル場合ニ用フル助詞ノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ、最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例　月ト花。
宗教ト道德ノ關係。
京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例
史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。
史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。
（文法上ノ許容）

二　用言（助動詞も含む）附屬の助詞

このまゝに朽ち果てば、いかに悔しからむ。

この家を失へば、身をおくに處なし。

「ば」は用言の未然形已然形に連り、未然形に連る時は未定の條件を示し、已然形に連る時は、既定の條件を示す。

老年に至りて悔ゆとも及ばざらむ。

暮れぬ中にと急げど日ははや山の端に傾きぬ。

賣らむと思へども買ふ者なし。

「とも」は用言の終止形に連り、「ど」「ども」は已然形に連り、前者は未定の條件を示し、後者は既定の條件を示す。

水害を免れたりと聞く。

汝は音樂を學ぶや。

父母の恩を忘るな。

右はいづれも用言の終止形に連る。(但し「な」のみは良行變格に限りて其連體形に連る。)然して「と」は接續に用ひ、「や」は疑問、「な」は禁止の意を示す。

いかに苦しくとも暫く堪へ忍ぶべし。

の如く、「とも」は形容詞の連用形に連ることあり。

注意(一)　助詞ノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體形ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例　數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

助詞ノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體形ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。

例　月出ヅルト見エテ。
　　嘲弄セラルヽト思ヒテ。
　　終日業務ヲ取扱ハシムルト云フ。
　　萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

（文法上ノ許容）

終日待ちけるが、遂に來らざりき。

定めて荒れたらむと思ひしに、たゞ庭前の松の倒れたるがあるのみ。

靜閑を以て名高かりしを、今は家多く立並びて其の風景見るべからず。

「が」「に」「を」は用言の連體形に接續する助詞にして、いづれも前後一致せざる場合に用ふ。

今日の危機をいかにするか。

死すべき時は今なるぞ。

閣下の任なほ重きかな。

「か」「ぞ」「かな」も亦連體形に接續す。然して「か」は疑問「ぞ」は指示「かな」は感動の意をあらはす。

「いつ」「いづこ」「いかに」等の疑問の詞上にあるときは「か」の助詞を用ふるが常なり。

注意(二)上ニ疑ヒノ語アルトキニ、下ニ疑ヒノ助詞ノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例　誰ニヤ問ハン。
　　幾何ナルヤ。
　　如何ナル故ニヤ。
　　如何ニスベキヤ。

（文法上ノ許容）

三　係詞の助詞

花開く。
水清し。
風吹きぬ。

の如く、文の末は用言(または助動詞)の終止形にて結ぶを常とすれども。

花ぞ開くる
水なむ清き
風か吹きぬる
人や訪ひつる

の如く、上に「ぞ」「なむ」「か」「や」の助詞あるときは、連體形にて結び、また

花こそ開くれ
水こそ清けれ
風こそ吹かね

の如く、上に「こそ」の助詞あるときは、已然形にて結ぶものとす。この「ぞ」「なむ」「か」「や」「こそ」の助詞を係詞といひ、その結びの詞を、係詞に對して結詞といひ、この約束を係結法といふ。係詞の「か」「や」は前に說ける疑問の助詞にして、「ぞ」「なむ」「こそ」は、いづれも、とりわきて一の事物を指示する助詞なり。然して其指示の意の最強きは「こそ」にして、「ぞ」「なむ」は「こそ」に比すればやゝ輕し。

語り傳へたりとぞ。
いとはづかしき事になむ。
ふたゝび遇ひ見ざりきとか。
今はこの世にいまさぬにや。
感ずべきことにこそ。

の如く、係詞にて結びて、結詞を省くこともありと知るべし。

係詞は體言、用言、助詞、助動詞等種々の詞に連續す。

係結の法は專ら歌謠美文の上に存し、普通文には少く、口語文には全く存せず

練習(一) 次の文中助詞の接續に誤あらば正せ。

一　過激なる運動をするな。

二　出席せるや否を檢すべし。

三　汝はこの事を學びたるや。

四　適せるや否を考へざるべからず。

五　今は遁れぬところと覺ゆぞ。

六　汝はこの事を知れるや。

七　何故に養生し給はぬや。

八　みだりに手を觸るるな。

練習(二) 次の文中係結の誤あらば正せ。

一　櫻ぞ實に花の王なりけれ。

二　梅の花なむにほひそめぬ。

三　我身の末やいかになるべし。

四　好きこそ物の上手なり。

五　雪の降るこそ面白し。

六　感ぜぬものこそなかりけり。

第七章　假名遣及音便

恩に酬いたり。

友を誘ひたり。

兵を率ゐたり。

右の酬い、誘ひ、率ゐの「い」「ひ」「ゐ」は同樣に發音しながら、これを書きあらはす假名は各異り。かくの如く同音の語を書きわくる法を**假名遣**といふ。

活用の上に「い」を用ふるは、也行上二段活用の、老い、悔い、報い（酬い）の三語にして、これらは「ゆ」「ゆる」と活用するを知らば、他の行に誤ることなかるべし。

活用の上に「え」を用ふる也行下二段活用の、榮え、消え、見えなども「ゆ」「ゆる」と活用するを知らば、紛るゝ事なかるべし。

活用の上に「ゐ」を用ふる動詞は、和行上一段活用の、居る、率ゐるの二語なり。

活用の上に「ゑ」を用ふる動詞は、和行下二段活用の、植ゑ、飢ゑ、据ゑの三語なり。

活用の上に「ひ」又は「へ」を用ふる動詞は、波行に活用する動詞なる事を知らば、他に紛るゝ憂なかるべし。

活用の上に「う」を用ふる動詞は、和行下二段活用の植う、飢う、据うの三語なり。

あわて惑うて逃げ走るを、彼は追うて庭に出でたり。

の、惑うて、追うては、惑ひて、追ひての「ひ」の「う」に轉じたるものなり。かくの如く音の轉ずるを音便といふ。

問う(ひ)て　笑う(ひ)て　食う(ひ)て
讀ん(み)で　飛ん(び)で　死ん(に)で
取つ(り)て　打つ(ち)て　笑つ(ひ)て
書い(き)たり　碎い(き)たり　指い(し)たり

の如く、動詞の「て」または「たり」につゞくときは、其活用の「ひ」は「う」となり、「み」「び」「に」は「ん」となり、「り」「ち」「ひ」は「つ」となり、「き」「し」は「い」となる、これ皆音便なり。

月清う(く)して風涼し。
苦しい(き)時の神だのみ。
印度人よりも黑い(し)とて笑ふ。
日曜は[illegible](し)とて悅ぶ。

の如く、形容詞[illegible]用も、「く」は「う」となり、「き」「し」は「い」となり、又「樂し」「苦し」等の「し」は「しい」となる。これまた音便なり。

口語にては、音便を用ふること多しと知るべし。

練習(一)　次の文中假名遣の誤あらば正せ。

一　笑ふて答えず。

二　歌いて植へよや門田の早苗。

三　絶へず雨降るは堪えがたし。

四　寒さを防がないと、老ひたる猫が凍へなければならぬ。

練習(二)　次の文中の音便を指摘して、其もとの假名を示せ。

一　今[illegible]てもかへらぬ事。

二　飛[illegible]にいる夏の蟲。

三　勝つて兜の緒を締めよ。

四　何にも書いてない紙に包んでおいた。

練習(三)　次の文中の形容詞の活用を音便に改めよ。

一　寒くもなく暑くもなく、誠によき時候です。

二　形のよき色の美しきのが好ましきものです。

三　これを持つて歸つて、早く兩親を悦ばせるがよし。

練習(四)　次の形容詞の活用の音便を、もとの形に改めよ。

一　あかるう見ゆるほど心地よい事はない。

二　その色のうるはしう、その香のゆかしい事も一の原因なるべし。

三　御兩親樣には御かはりなう暮させられ候ふ由、何より嬉しう存じ奉り候。

第八章　體言と用言との關係

主語　述語　客語　補語

鳥鳴く。
風涼し。
我は愁ふ。
死は易し。

の如く、「鳴く」「涼し」「愁ふ」「易し」は、各その上なる事物を説明せる用言なり。かくの如く説明する用言を**述語**といひ、説明せらるゝ事物を**主語**といふ。主語は體言(もしくは準體言)なり。

(一)　鳥鳴く。
(二)　暴風　覆す。
(三)　教師　戒む。

上例にて、(一)はこのまゝにて意義分明なれども、(二)(三)は述語のみにては其意完からず。

暴風船を覆す。
教師生徒を戒む。

の如く動作の目的たるべき事物を加へて、始めて其意完し。かくの如く述語の意を完からしむる爲に用ふる體言を**客語**といふ。

客語を要せざる述語の動詞は、其動作他物に及ぶことなきを以て、必ず自動詞なり。これに反して、客語を要する述語の動詞は、其動作他物に及ぶを以て必ず他動詞なり。

子親に似る。
毛蟲蝶となる。

彼は貧民に金錢を施す。

父は長女に財産を讓る。

の如く、「似る」「なる」の自動詞が述語となりて、なほ其意の完からざるあり。また「施す」「讓る」の他動詞が述語となり、「金錢」「財産」の客語ありて、なほ其意の完からざるあり。かゝる場合に其意を補ふ「親」「蝶」「貧民」「長女」等の語を補語といふ。

客語には「を」といふ助詞を伴ひ、補語には「に」「と」等の助詞を伴ふを常とす。

語の順序は、主語第一位を占め、述語は最下に位し、客語補語は主語の下、述語の上におかるゝを通則とす。

こひし(述語)我が家の跡。(主語)

かへせ(述語)我が母を。(客語)

の如く、語の順序の倒置せらるゝは、歌謠美文等に多し。

練習　次の文中の各成分を指摘せよ。

一　湯水となる。

二　筆は劍に勝る。

三　塵積りて山となる。

四　河海は細流を擇ばず。

五　櫻花雪に似たり。

六　源實朝は公曉に殺されたり。

七　彼は妹に數學を教ふ。

八　紫式部は源氏物語をつくる。

第九章　修飾語

頑是なき稚兒は笑を含めり。

深綠色の波は白雪の如き泡沫を飛ばす。

火は炎々と燃え出づ。

草木所え顏に生ひ茂る。

春はくれども花咲かず。

「頑是なき」「深綠色の」「白雪の如き」は文中の體言にかゝり、「炎々と」「所え顏に」「春はくれども」は文中の用言にかゝりて、いづれも其意を一層明かに說明せるものなり。かゝる用をなす語を**修飾語**といふ。

上例中「春はくれども」は「春」といふ主語と「來る」といふ述語とよりなれる一箇の文にして、これに「ども」といふ助詞を接續せしめたるものなり。かくの如く、一つの文の述語に、「ば」「ど」「ども」「とも」「が」「に」「を」等の助詞の接續して、修飾語となることありと知るべし。

體言にかゝる修飾語は、概ね形容詞の如き性質を有するを以て**形容詞的修飾語**と稱し、用言にかゝる修飾語は、專ら副詞の如き性質を有するを以て、**副詞的修飾語**と稱す。

修飾語の位置は、形容詞的修飾語は體言の上におかれ、副詞的修飾語は用言又は述語の上におかるゝを常とす。

練習　次の文中の修飾語を指摘せよ。

一　蓮の花涼しげに咲き出づ。

二　風吹けば波たちさわぐ。

三　緑の色深き夏木立は、春の花にも劣らず。

四　太陽西に傾けば涼風袂を吹く。

五　雲間に高き富士山は、皚々たる白雪を戴く。

六　漁火は、螢火の亂れ飛ぶに似たり。

七　うるはしき家の下は鯉鮒の潜みたる淵なり。

八　よせくる波はあらくとも汝等ひるむことなかれ。

九　我はすみ渡れる明月を、清き水に宿して見る。

十　無邪氣なる鷗の群は、この岸とかの波との間を翺翔せり。

第十章　獨立語

主語、客語、述語、補語、修飾語は、いづれも文の成分なり。これらの成分と形の上に於て何等の關係なき別種の成分あり。これを獨立語といふ。

諸姉よ、諸姉は心の美人たらむと思はずや。

の「諸姉よ」の如く呼びかくる語は獨立語なり。

あゝ、われ何ぞ生を惜まむや。

の「あゝ」の如く感動をあらはす詞は獨立語なり。

英語は、余已にこれを學びたり。

の「英語は」の如く特に冒頭に掲出して、下に代名詞の「これ」に

て繰返せるは獨立語なり。

練習　次の文中の主語と獨立語とを指摘せよ。

一　瓢や瓢や、我汝を愛す。

二　君よ、君は何を憂へ給ふぞ。

三　あはれ、不運の者どもかな。

四　すはや、敵兵おしよせたり。

五　あはれ、今年の秋もゆくなり。

六　大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治し給ふ。

第十一章　單文

風吹く。

霜白し。

船海に浮ぶ。

猫鼠を捕ふ。

上例は、いづれも主語と述語との關係の成立、唯一回のみのものなり。かくの如きを、文法上**單文**といふ。

あらき風、俄に吹きいづ。

大なる船、鏡の如き海に浮ぶ。

隣家の黑き猫、小鳥を捕ふ。

の如く、修飾語の有無多少は、文の單複に關係なきものなり。

余は庭に萩、桔梗、女郎花を栽ゑたり。

我は、師につきて、國語、家事、裁縫を學びぬ。

の如く、客語の多少もまた然り。

林子平、高山彦九郎、蒲生君平は、卽寛政の三奇士なり。

の如きは、單語三つを一團の主語として、一の述語に連結せしめたるものにて、これまた單文なり。

練習　次なる單語に他の單語を添へて、各一の單文とせよ。

一　秋風　　**二**　菊

三　動物　　**四**　植物

五　敎ふ　　**六**　勉强す

七　養ふ　　**八**　益あり

第十二章　重文

鳥うたふ。

蝶舞ふ。

右の二つの單文を重ぬれば、

鳥うたひ蝶舞ふ。

となりて、一つの文となるべし。かくの如く單文の重なりたるものを**重文**といふ。

風吹き、雨降り、電閃き、雷轟く。

の如く、重文には、二箇以上の單文の重なることもあり。

重文をつくるには、上文の述語の形を連用形に改めて重ぬるものとす。

練習　次の文は、單文重文のいづれに屬するか。

一　帆前船見え汽船走る。

二　海鳥この島に群居す。

三　我は花を愛し、彼は月を好む。

四　木曾義仲は、粟津が原の露と消え、平家の一門は西海の波に漂ふ。

五　昆蟲は花の蜜に養はる。然して、花は昆蟲の媒介によりて實を結ぶ。

六　松風は源平對陣の昔を語るが如し。

第十三章　複文

(一)　花の散るは風これを誘へばなり。

(二)　余は電光の閃くを見たり。

(三)　彼は殆、人跡の到らざる地に草庵を結べり。

以上の文中、

花の散る

電光の閃く

人跡の到らざる

の三つは、主語客語或は修飾語の位置をしめて、單語の代用をなせるものなり。然して、これらは皆主語と述語とを備へたる單文なり。

かくの如く主語述語の關係二回以上に及ぶものを**複文**と

いふ。

上例に示せる如く、文が獨立を失ひて、他の文の成分の位置を占むるものを**句**といふ。然して「花の散る」「電光の閃く」の如く、主語又は客語として用ひられたるを**名詞句**といひ、

彼は殆、人跡の到らざる地に草庵を結べり。

花咲く朝は鳥も歌ふ。

の如く、下の體言を形容せるを**形容句**といひ、

風吹きて花ちる。

の如く、下の用言を説明せるを**副詞句**といふ。

名詞句、形容句、副詞句はいづれも他の文に附屬せるものなれば、**附屬句**といふ。

雪は降れども花は咲きたり

の如く、附屬句が主たる句に隷屬して、副詞的修飾語たるとき、其文はまた複文なり。

練習(一)　次の文中の句を指摘せよ。

一　余はこゝに中納言宗行卿の墳墓ありと聞けり。

二　歳寒うして松柏の凋むに後るゝことを知る。

三　彼は毫も船體の動くを感ぜざるものゝ如し。

四　魚は水の清きところにはすまず。

練習(二)　次の文につきて單文複文を區別せよ。

一　上杉武田は戰國時代の二傑なり。

二　北には中國の山系、蜿蜒として横たはる。

三　人の最も貴ぶ寶石は金剛石なり。

四　農家漁舍の隱見せる風景、いかなる人の筆にも及びがたし。

五　ある博物家は、海鳥の雛に游ぐことを敎ふるを見たり。

第十四章　文の成分の節略

多く聞きて少しく言へ。

この土手に上るべからず。

の如く、命令をあらはす文は、多く主語を省く。

いま富岳の絶頂に立つ。

大山元帥をして、滿洲軍總指揮官たらしむ。

の如く、主語にあたるもの說者自身なるか、又は一般に熟知せられたるものなるとき其主語を省く。

我は月を愛し、(我は)花を愛し、また(我は)雪を愛す。

の如く、重文をなせる各單文の主語同一なるときは、最初の單文のほかは、悉く其主語を省くを常とす。

我は病めれば(我は)花を見ず。

の如く、複文をなせる主從の二句の主語同一なるときは、其一を省くを常とす。

口は禍の門。(なり)

一寸の蟲にも五分の魂。(あり)

の如く述語を省くこともあり。また

彼も(我を)待たむ。

彼は(これを)事ともせず。

の如く客語を省くこともありと知るべし。

練習　次の文の省略せられたる成分をいへ。

一　勉強は幸福の母。

二　終日待てども來らず。

三　彼は歌をよみ詩をつくる。

四　余は少しも知らざりき。

五　我は足よわければ遠足にゆかず

六　人の短をいふこと勿れ。

七　物盛なれば衰ふ。

八　詔して皇室典範を定む。

第十五章　文の解剖

文をそれ〴〵の成分に分解するを、文の解剖といふ。

(一)　彼は清らかなる一室にて琴を彈ず。

右の文の成分を檢するに、

「彼は」は主語なり。

「彈ず」は述語なり。

「琴を」は彈ずといふ他動詞の述語に要する客語なり。

「清らかなる一室にて」は述語に對する副詞的修飾語な

り。

右の文の構造を檢するに、

この文は、主語述語の關係一回に過ぎざれば單文なり。

其成分構造左の如し。

單文			
主語	副、修飾語	客語	述語
彼は	清らかなる一室にて	琴を	彈ず。

(二)　爺は山に行きて柴を刈り、媼は河に行きて洗濯をなす。

右の文の成分を檢するに、

「爺は」「媼は」ともに主語なり。

「刈り」「なす」はともに他動詞にして述語なり。

「柴を」「洗濯を」は各其述語の要する客語なり。

「山に行きて」「河に行きて」は、各其下なる述語に對する副詞的修飾語なり。

右の文の構造を檢するに、

「爺は山に行きて柴を刈り」の單文と、「媼は河に行きて洗濯をなす」の單文と重なりたるものなれば重文なり。

其成分構造左の如し。

重文							
單文				單文			
主語	副、修飾語	客語	述語	主語	副、修飾語	客語	述語
爺は	山に行きて	柴を	刈り	媼は	河に行きて	洗濯を	なす

(三)　我は老人の少女に花をおくるを見たり。

右の文の成分を檢するに、

「我は」はこの文の主語なり。

「見たり」は他動詞にして述語なり。

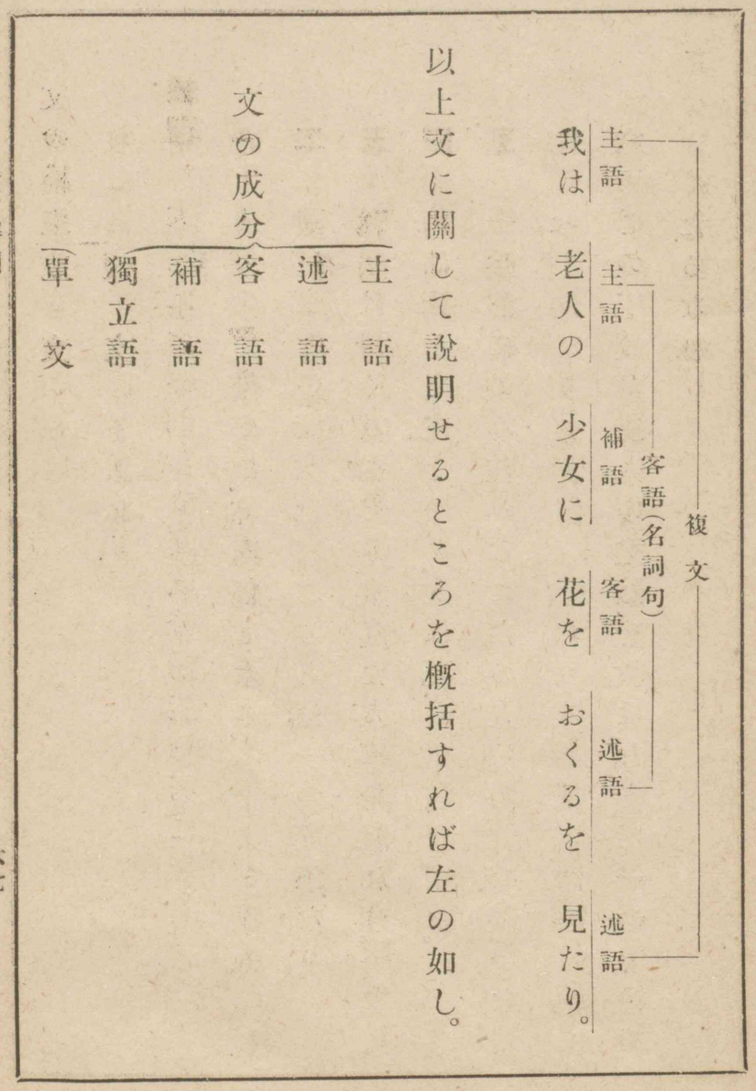
「老人の少女に花をおくるを」は述語の要する客語にして、名詞句なり。

「老人の」は名詞句の主語、「おくる」は述語、「花を」は客語、「少女に」は補語なり。

右の文の構造を檢するに、

「我は……見たり」「老人の……おくる」と主語述語の關係二回に及べるが故に複文なり。

其成分構造左の如し。



以上文に關して說明せるところを概括すれば左の如し。

文の成分
- 主語
- 述語
- 客語
- 補語
- 獨立語

（單文）

文の構造 重文 複文

練習 次の文を解剖して其成分構造を明にせよ。

一 風霜山を侵せば、林樹紅となる。

二 國民がその國語を尊ぶことは一の美德なり。

三 鸚鵡はよく言へども、飛鳥たる事を離れず。

四 豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

五 平生都にのみ住みなれたる人は、田舍を羨むなるべし。

六 この家僕は、主人の危險を救はむとて一命を捨てたるなり。

七 彼はこの可憐なる王の末路に涙を濺げり。

八 玉みがかざれば光なく、人學ばざれば智なし。

九 庭前の櫻花は既に散りて、若葉の綠したゝるばかりに見ゆ。

十 默々のうちに移りゆく自然の光景は、何事を我等に教ふるならむ。

十一 災禍は世に多けれども、戰爭に勝るはあらざるべし。

十二 樹靜かならむと欲すれども風やまず。子養はむと欲すれども親いまさず。

増訂 女子文法教科書下卷 終

推量	べく	べく	べし	べき	べけれ			
	べから	べかり	べかり	(べかる)	(べかれ)			
	○	○	まし	まし	ましか			
	○	○	らし	〔らし〕	〔らし〕			
希望	たく	たく	たし	たき	たけれ			
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね			
	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ			
	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ			
	○	○	じ	〔じ〕	〔じ〕			
比較	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○			

（最下の一欄は生徒記入の用に宛つ）

文語助動詞活用表

種類／活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	動詞との連續
受身	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	
	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	
可能	れ	れ	る	るる	るれ		
	られ	られ	らる	らるる	らるれ		
使役	せ	せ	す	する	すれ	せよ	
	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ	
	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ	
完了	て	て	つ	つる	つれ	てよ	
	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	
	たら	たり	たり	たる	たれ		
	(ら)	(り)	り	る	(れ)		
過去	○	○	き	し	しか		
	(けら)	○	けり	ける	けれ		
未來	○	○	む	む	め		
指定	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ	
	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ	
推量	○	○	めり	める	めれ		
	○	○	らむ	らむ	らめ		
	○	○	けむ	けむ	けめ		
	べく	べく	べし	べき	べけれ		
	べから	べかり	べかり	べかる	(べかれ)		
	○	○	まし	まし	ましか		
	○	○	らし	〔らし〕	〔らし〕		
希望	たく	たく	たし	たき	たけれ		
打消	ず	ず	ず	ぬ	ね		
	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ		
	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ		
	○	○	じ	〔じ〕	〔じ〕		
比較	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○		

（最下の一欄は生徒記入の用に宛つ）

希望	打消		
たく	○	○	
たく	○	ず	
たい	まい	ぬ(ん)	
たい	○	ぬ(ん)	
たけれ たいけれ	○	ね	
○	○	○	

口語助動詞活用表

種類／活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
受身	れ	れ	れる	れる	れれ	れ（いろよ）
	られ	られ	られる	られる	られれ	られ（いろよ）
可能	れ	れ	れる	れる	れれ	○
	られ	られ	られる	られる	られれ	○
使役	せ	せ	せる	せる	せれ	せ（いろよ）
	させ	させ	させる	させる	させれ	させ（いろよ）
過去	たら	たり	た	た	たれ（たらたれ）	○
未來	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○
推量	○	○	○	○	○	○
	○	○	○	○	○	○
	らしく	らしく	らしい	らしい	らしけれ（らしいけれ）	○
指定	(の)でせ	(の)でし	(の)です	○	○	○
	だら	たつで	だ	○	○	○
打消	○	○	ない	ない	なけれ	○
	○	ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	○
	○	○	まい	○	○	○
希望	たく	たく	たい	たい	たけれ（たいけれ）	○

動詞と助動詞との連續表

其一

未然形	助動詞	連用形	助動詞	終止形	助動詞	連體形	助動詞

動詞と助動詞との連續表

其一

	未然形	助動詞	連用形	助動詞	終止形	助動詞	連體形	助動詞
四段	讀ま	る す	讀み	き	讀む	べし らん らし まじ	讀む	べし らん らし まじ
良行變格	有ら		有り				有る	
奈行變格	死な		死に		死ぬ		死ぬる	
上二段	起き		起き		起く		起くる	
下二段	受け		受け		受く		受くる	
上一段	着		着		着る		着る	
下一段	蹴		蹴		蹴る		蹴る	
佐行變格	爲(せ)	さす らる	し	き	す		する	
加行變格	來(こ)	ざる じず むし まし	き	き つ ぬ たり けん けり たし	く		くる	なり (ごとし)

其二

	未然形	助動詞	連用形	助動詞	已然形	助動詞
四段	讀ま	り し しか	讀み	き し しか	讀め	り
加行變格	來(こ)		き		くれ	
佐行變格	爲(せ)		し	き	すれ	

連用形に連る過去の助動詞「き」の活用「し」「しか」は、加行佐行兩變格動詞に限りて、上表の如く未然形につき、加行變格には連用形にもつく。又その活用「き」は、佐行變格の連用形にのみつく。

明治四十四年十月十五日印刷
明治四十五年一月十二日訂正再版印刷
大正七年十一月二十一日訂正三版印刷
大正八年二月二十日訂正四版印刷
大正八年二月二十五日訂正四版發行

明治四十四年十月二十日發行
明治四十五年一月十五日訂正再版發行
大正七年十一月二十四日訂正三版發行

定價
定價金二拾三錢
大正九年度臨時
定價金參拾九錢

不許複製
增訂女子文法教科書

著作者　關根正直
著作者　古谷知新
發行者　大葉久吉
東京市日本橋區本石町三丁目十七番地
印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

發行所
東京市日本橋區本石町三丁目
振替口座東京二八〇番
東京寶文館
大阪市東區淡路町四丁目
振替口座大阪四三番
合資會社
大阪寶文館
關西專賣

佐野安江

明治四十四年十月十五日印刷
明治四十五年一月十二日訂正再版印刷
大正七年十一月二十一日訂正三版印刷
大正八年二月二十日訂正四版印刷
大正八年二月二十五日訂正四版發行

明治四十四年十月二十日發行
明治四十五年一月十五日訂正再版發行
大正七年十一月二十四日訂正三版發行

定價 金貳拾三錢

不許複製

增訂女子文法教科書

著作者 關根正直
著作者 古谷知新
發行者 大葉久吉
東京市日本橋區本石町三丁目十七番地
印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社

發行所 東京寶文館
東京市日本橋區本石町三丁目
振替口座東京二八〇番
關西專賣 大阪寶文館
大阪市東區淡路町四丁目
振替口座大阪四三番
合資會社

佐郭安江

版權總文圖